

再発見・牛久第三十二話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

熊沢蕃山と牛久③

思想家(陽明学)熊沢蕃山

と牛久藩藩主山口家

—蕃山の生家—

野尻家は代々牛久藩重臣—

蕃山と古河藩

—蕃山の古河地方の諸治績—

蕃山は、岡山藩藩主池田光政に番頭(格は家老に次ぐ職)という重職で仕え、経世済民に手腕を発揮していたが、致仕して知行地だった寺口村(蕃山村)に隠退にした。

当時、江戸幕府の將軍は、徳川第4代家綱(在職1651年〜1680年)で、家綱は仁政思想をもって幕政を武断政治(武力を背景にした強引な政治)から文治政治(学問や法制の力)への転換を図っていた。

家綱は、陽明学を極め、実践的な経世思想に特色があり、諸藩主や京の公卿の間に名声高い蕃山の閉居を大いに惜しんで内命を下した。その内命によって蕃山は、

播磨国の明石藩(現兵庫県明石市)藩主松平信之に預けられた。信之

が大和国郡山(現奈良県大和郡山市)に移封になると蕃山も移り、さらに下総国古河(現茨城県古河市)に移封になると古河にも移ってきた。

蕃山は、古河藩の民政面に助言を与えていた。その治績には、渡良瀬川築堤(蕃山堤という)や、菅笠づくり・杭打ち法などがある。

蕃山は、古河に4年間いて、元禄4年(1691年)に病没した。藩主土井忠之は、蕃山を儒礼をもって正源山鮭延寺(現古河市大堤)に葬っている。

蕃山の養父熊沢守久 —徳川光圀の御守役—

蕃山の養父熊沢半右衛門守久(母方の祖父)の父玄理は徳川家康の家臣であった。守久は、水戸・徳川家初代頼房に召し抱えられて、第2代光圀の御守役を努め、御書院番三百石取であった(光圀

は講談『水戸黄門漫遊記』のモデル)。守久は青年の頃、諸国武者修行に出て、柴田勝家、宇喜多秀家、福島正則らに仕えた。

鮭延寺と蕃山の墓所

古河市大堤(旧総和町)の曹洞

宗大本山永平寺直末正源山鮭延寺は、江戸幕府第3代將軍徳川家光治世下の慶安元年(1648年)までは寛永14年(1637年)6月の開創と言われ、開基は鮭延越前守秀綱である。秀綱は出羽国庄内藩主(現山形県鶴岡市)最上家の重臣で禄高1万5千石を与えられていたが、最上家が故あつて改易となり家臣離散となった。出羽を去る秀綱の徳を慕う家臣14名が付き従い、主従は下総佐倉藩主(のち大老)土井利勝のもとに身を寄せた。利勝が古河に移封になると、秀綱と14名の家臣も古河に移ってきた。利勝より、秀綱は5千石をもつて処遇され、約11町歩の屋敷が与えられた。秀綱は5千石の禄全部を家臣たちに分け与え、順番に寄食して余生を送ったが、正保3年(1646年)、84歳をもって病没した。旧家臣たちは、古河藩主土

井利隆に願つて、秀綱の旧屋敷の一郭に、秀綱の遺骸を葬り、一寺を建立して、苗字の鮭延をもって寺号とし、その菩提を弔った。(主たる参考資料・鮭延寺沿革史)

熊沢伯継伝

—著者藤田幽谷—

藤田幽谷(安永3年・1774年〜文政9年・1826年)は水戸・徳川家第7代治紀のときに、彰考館総裁に抜擢され大日本史編さん事業に当たった。儒学者でもあつた幽谷は、蕃山の境涯や思想学説に共感して熊沢伯継伝を書いた。



古河市大堤の正源山鮭延寺の熊沢蕃山墓所(県指定文化財史跡)
—写真提供正源山鮭延寺—